

——70年の歴史をたどり、今後を探る——

福島県卓球協会設立70周年記念

☆座 談 会

第1部 「福島県卓球協会70年のあゆみを語る」

○と き 平成11年5月16日（日）10：00～

○ところ 福島市「福島体育館」

第2部 「福島県卓球協会の今後を語る」

○と き 平成11年6月5日（土）13：30～

○ところ 福島市「福島体育館」

座 談 会

はじめに ～座談会の開催にあたって～

「福島県卓球協会70年史」を編纂するにあたって、座談会を2回にわたり開催いたします。

第1回のテーマは、「福島県卓球協会設立70周年のあゆみを語る」とし、本協会の創草期から平成7年に本県で開催されました第50回「ふくしま国体」までを、およそ次の3期に区分し、この企画で最も重要な部分について集録することにいたしました。

- 第1期は、発足の頃から戦前戦後の活動（昭和4年～昭和30年代）
- 第2期は、組織確立の時代、そして「53インターハイ」からの飛躍（昭和40年～昭和60年代）
- 第3期は、第50回「ふくしま国体」の成功に向けて（平成元年～平成7年）

第2回のテーマは、「福島県卓球協会の今後を語る」とし、「ふくしま国体」開催後の平成8年から現在、そして21世紀への展望を「新しき時代への架け橋」と題して語り合い、これを収録することになり、2部構成で座談会を進めて参りますので、何とぞよろしく願いいたします。

なお、出席者の構成メンバーにつきましては、「記念誌編纂委員会」で原案をまとめ第1回「記念事業実行委員会総会」で決めさせていただきました。（協会長／西郷徹夫）

第一部「福島県卓球協会70年のあゆみを語る」

- と き 平成11年5月16日（日）10：00～
- ところ 福島市「福島体育館」
- ☆ 発足のころから戦前戦後の活動（昭和4年～昭和30年代）
- ☆ 組織確立の時代、そして「53インターハイ」からの飛躍（昭和40年～昭和60年代）
- ☆ 第50回「ふくしま国体」の成功に向けて（平成元年～平成7年代）

出席者

司会：宇賀神 喜 嗣 進行：伊 東 守 信
記録：長 場 壯 夫

三 浦 勝 美 土 屋 弘 佐 藤 昭 典 大 橋 征
壁 谷 之 夫 松 崎 俊 一 岸 ひろみ 西 郷 徹 夫

進 行 座談会第一部を始めます。司会をつとめます伊東守信です。では、会長よりご挨拶をいただきます。

会長あいさつ（第1部）

本日は、ご多忙の中、また遠路ご参集いただきまして誠にありがとうございます。

ご案内のように、県卓球協会は、本年、設立70周年を迎えることになりました。

私たち役員が、70周年の節目にあたり「記念誌」を編纂・刊行しようという提案があり、理事会等で幾度か検討を重ねた結果、「福島県卓球協会70年史編纂計画」の大綱を決め、宇賀神喜嗣先生を委員長とする「編纂委員会」を設置し、役割分担をして、その編纂に取り組んできたところであります。

その後、記念誌の発刊に加えて記念の事業として、記念式典、記念祝賀会、シンボルマークの公募・

作成と協会旗の作製、功労者表彰並びに感謝状贈呈等を行い、協会70年の歴史のあゆみを祝うことになりました。記念誌刊行の仕事は、今後とも編纂委員会委員の皆さんに大変お骨折りをいただくこととなりますが、後世に残す福島県卓球協会70年のあゆみを立派にまとめていただきたいと思います。昭和4年12月1日に本協会が発足しましたが、設立にいたる経過、その後の当協会の変遷など、種々記憶が薄れかけていることを何とか掘り起こしていただき、参考資料の第1部福島県卓球協会誌・第1節「福島県卓球協会の設立と活動のあゆみ」をもとに、本協会が歩んできた足跡をたどりながら、伝え聞いてきたことや、思い出などを語り合っていただくために、本日の座談会を開催することになりました。

なにせ、古い時代のことであり、70年の歴史を刻んでいるのですから、当然私自身も知らない時代があり、どうしても本日お集まりの諸先輩にご登場願わなくてはなりません。

特に、本協会の歴史に最も詳しい宇賀神喜副、三浦勝美、佐藤昭典、土屋 弘、大橋 征の各氏のお話を中心にお伺いしながら、その他皆さんからも貴重なお話をお願いしたいと思いますので、どうぞ忌憚のないご発言をいただきたいと存じます。

本日は、お忙しい中ご参集いただき誠にありがとうございました。(協会長／西郷徹夫)

進行 ありがとうございます。それでは、本日の座長の宇賀神さんに司会をお願いします。

司会 70周年誌、大変な事業だと思います。こういうことなら理事長時代に準備をしておけばよかったと思いますが、理事長が終われば次の人へ引き継いでしまい、忘れてしまったことも多くあるので、気が付いたことがあれば教えていただきたいと思います。

「福島県卓球協会の70年を語る」ということで、1、発足の頃 2、組織確立の時代 3、「第50回ふくしま国体」の順に、話をしていただきたいと思います。

まずはじめに、発足の頃、戦前ですね。このころは、昭和17年頃の私が20歳頃です。私が知っているのは田辺さん、平出さん、志賀さん、信沢さんあたりでしょうか。私が理事長時代に、民報・民友新聞で福島県の百科事典のようなものを出しまして、その時に卓球を頼まれたものですから、その時に調べたものを卓球協会誌として出したことがあるんです。戦前については、その資料を見ていただければと思います。もし、三浦先生が目黒先生のことなどわかりましたら出してください。

佐藤 昭和12～3年頃から、各地区で地区選手権をしていた。私が初参加したのは昭和16年で、すでに50～60人の選手が集まってやっていた。その他に交流試合や練習試合のようなことをやっていた。戦前はそんな形でやっていたんですね。

司会 小高の鈴木重郎治(3代会長)さんがいましたね。

佐藤 重郎治さんは、戦前もやっていましたが兵隊にいらしたから、復員後の昭和23年頃、また始めました。

司会 戦争で卓球はできなかったんでしょう。禁止令が出たんでしょう。

佐藤 いや、昭和18年、19年までやっていましたよ。その後、福島県卓球連盟が昭和21年か22年頃復活したんですよ。

会長 それに関連しまして、卓球連盟が活動したのは、戦後22年からで、それ以前の活動は宇賀神先生の書かれた協会誌を見ますと、原町市の木幡美明氏所蔵の福島卓球会という機関誌があり、その中に昭和4年12月1日より、これを施行する。ということで、協会の会則が生まれたようです。70年の歴史があるということは、みんなびっくりするんですよ。このころははっきり資料が残っているので、設立されてから70年がたっているということを認められるわけですね。

司会 それでは、戦後に入らせてもらいます。

松崎 戦後の20年から40年まで、前半から年代を追って、進めていきましょう。

司会 資料の朗読1……………。

目黒さんを中心に再建され活動が始まった。昭和23年9月19日・20日の両日、福島市飯坂小学校で全国軟式卓球選手権大会が開催された。山下さん（ニックタク KK）に確認しましたので確かです。

- 三浦 飯坂の小学校の講堂が会場だったんですよ。ところが台風で相当の選手がこれなくて、組合せをやり直して大会をやったんです。その記憶があるんです。昔は講堂に卓球台を集めてやったんです。
- 司会 資料の朗読2……………。
- この大会は目黒さんの花道としてやったと聞いている。そして、24年に後藤さんが会長、菱沼さんが理事長でやったのではないかと記憶しています。
- 佐藤 佐藤理三郎さんが事務局長をしていたんです。
- 三浦 飯坂公民館が事務局になっていた。
- 司会 実業団と職域対抗は？。
- 佐藤 職域対抗は昭和25年から、実業団は28年からあった。これは全国大会まであった。
- 松崎 実業団として、郡山では、専売、東北電力、貯金局、工機部の4つくらいが強かった。市役所、保土谷化学があった。
- 土屋 職域対抗に出たチームが、実業団に参加していった。昭典さんが常磐炭坑で出てきた。会津からは、会津鉄道クラブ。
- 佐藤 いわきには、日本水素（化成）、呉羽化学などがあった。福島には、東亜栄養、東北電力、福島県庁などがあったんです。その後、林精器が出てきたんです。
- 大橋 高校の全国大会を22年にやっている。第2部として相馬中学校が参加している。23年に相馬高校が出てくる。24年に学校対抗。そして双葉高校がベスト8に入っている。全国大会が昭和22年にあったわけですが、どんな形で相馬中学校が参加していたんですか。
- 西郷 相馬中学校を指導していたのは、森口正作先生でした。後に私が中村第一中学校で教えていただいた。戦後相馬中学校を全国レベルにまで指導した先生です。
- 土屋 相馬は早くから、卓球が始まっていたということだね。会津は、23年に高校が卓球部を作り始めた。それ以前は愛好会なので大会には参加していない。
- 司会 日誌を見ながら、書きあげたものを読み上げる。
- 西郷 相馬市の卓球協会40年史の中に森口先生の功績について書いてある。
- 私は小高の半谷さんのところで卓球の指導を受けていた。半谷さんはとても優秀な方で東大を出ているんですよ。
- 司会 戦後20年代はこれくらいにして、いいですか。
- 大橋 福島県の大会は何時からやったのか。組織ができたころに大会をやったのではないか。
- 佐藤 昭和21年に第一回は飯坂小学校で開催された。半谷さんが優勝した。
- 土屋 試合が先にあり、その後、寄付を集めて昭和22年に福島県卓球連盟ができた。その後、昭和23年の8月に会津卓球連盟が作られた。
- 大橋 高校大会は、協会のお世話で賞状をやったのではないのでしょうかね。東北大会は25年からです。
- 司会 昭和30年代では、私が高体連の委員長になった時です。
- 土屋 マッカーサー杯という全国大会を会津に持ってきて、謹教小学校で開催した。29年のロンドンの世界選手権大会でアベック優勝したよね、あの勢いできたわけだ。その時、荻村、大川、唐橋などがきた。全国大会の俗にいうマッカーサー杯、中田さんが藤井に勝って優勝した。ラワン材の卓球台なので荻村さんがやらないといい、平出さんがしきりに、監督の八尾板さんになんてできないのだといい、無理やり了解させて試合をさせた。これは昭和30年代です。この29年の世界選手権大会でアベック優勝したことで、軟式から硬式に変わってきた。
- 壁谷 硬式になってから、国際式サイズになったのか。軟式の卓球台は細長い卓球台だった。中体連では、大工さんに頼んで、卓球台にくっつけて国際式のサイズにして試合をやっていた。

- 土屋 高校は23年から、硬式台を使っていた。一般人はまだ軟式をやっていた。
- 大橋 28年に高校大会の名称が変わって、全国高等学校卓球選手権大会となり、学校対抗と個人戦が行われた。まだ、ダブルスはなかった。
- 松崎 中体連は、郡山大会しかなかった。私が責任者をしていたが、高久田大一郎さんが須賀川一中の体育館で主催して、県の選抜大会を行った。その当時は3年連続優勝するとカップをくれるということで、私は男子を郡山五中で指導し、女子は壁谷先生が瀬川中学校で指導してカップをもらってきてしまった。それが29年から始まり、県大会は35年から会場が郡山一中で2年連続行った。
- 司会 高久田大一郎さんがこういう大会をやってくれたことは、偉いことでしたね。
- 松崎 おかげで、郡山大会しかなかったのが、他の地区の人達と試合ができたわけです。それがきっかけで県南にまで広がっていった。30年にブロック大会が行われた。33年に郡山一中で行われた。
- 壁谷 松崎先生が33年と34年の中体連の専門委員長で、その後、35年から私が引き継いだ。全国中学校卓球20周年誌にまとめているので見ていただきたい。
- 司会 30年代まではこの程度でいいでしょうか。
- 西郷 次は高体連の活躍になってくるのでしょうか。
- 司会 大橋先生の文書から、高体連の各地区の委員長が卓球連盟に理事として入った。
- 大橋 34.5年頃ですかね。各地区2名の理事だったのが、高体連の各地区委員長が入って3名になった。
- 司会 高体連の委員長になった時理事になった。中体連の人がいつから理事になったのか。また、高体連が先か実業団が先か知りたいですね。日記には、実業団卓球連盟の設立案があるのだが、いつ設立されたのかがわからない。
- 土屋 実業団の中から、地区の代表として理事の中に入っている人がいた。
- 西郷 私の記憶では、連盟から協会へ56年に変更した。会則の原案をつくり、変更したことを記憶している。その時に、実業団卓球連盟を位置づけたと思う。
教職員卓球連盟は、深谷先生が作られた。ベテラン会は、加盟していないが、登録団体である。
- 大橋 ベテラン会は登録していないが加盟団体で、佐藤さんがだれかいけないかということで、信沢さんを会長にお願いした。
- 土屋 私は、信沢さんが62年に初代会長になってから入った。
- 西郷 宇賀神さんが理事長をしていた苦労についてお話していただきたい。
- 司会 6年をやったら高体連をやめようと思ったが10年やってしまった。卓球を知らないのは私だけだった。でも、合議によって少なくとも組合せが明るくなったことは確かです。その後、理事長をやるように頼まれたが、財源の確保が大変だった。
- 土屋 松崎先生が財源確保に尽力してくれた。
- 司会 高体連は、各地区から500円をもらって3,000円で運営をしたのがスタートです。
- 松崎 48年に宇賀神さんと郡山西工業高校と郡山女子高校の入れ替えになったのがきっかけで、近所に住んでいた宇賀神さんをお手伝いしよう。財源確保と会計をしっかりとしなければならなかった。菅野源吉さんをお願いした。菅野源吉さんの功績は大きかった。彼は参加の申し込と一緒に参加料を取っていた。彼にまかしておけば間違いないかった。
- 司会 すべてが三浦先生のバックアップがあったからだと思うし、みんな応援してくれたからできた。中体連の壁谷先生の教えた選手が、シードを破った。壁谷先生は女子の指導はうまかった。新妻光雄先生は卓球を知らなかったが、素晴らしい指導者だと思う。
- 西郷 新妻先生のごことは、相馬高校100年史に出ているんです。タバコはひかりを吸っていたので、あだ名は「ピカリ」だった。選手たちにはちまきをさせて気合い入れて練習していたと当時

の選手が語っているのですよ。

- 松崎 磐女の安田和三先生、この先生も卓球は知らなかったが、指導者としては素晴らしいかった。
三浦 安達にいたとき、安田先生のことを思い出すが、大した指導者でした。
西郷 栃木県真岡女子高校の大島先生と同じタイプですね。
司会 昭和31年に郡女の顧問として、役員をした。その頃は、郡女の先生が役員をすることになっていた。その前は、三浦先生がやっていたが、笹山さんの段取りでそのようになっていた。仙台の庄司先生に目をつけられて、それから全国高体連卓球専門部の幹事になった。
- 松崎 宇賀神さんは、卓球を知らなかったから、よかったんじゃないか。
司会 福島、東北は、ニツクしか使わなかった。
土屋 関西は、TSPを使っていたので、全国大会にいくと、TSPを使っているの、じゃんけんに負けるとニツクのボールじゃなくなってしまう。
司会 40年代はこれくらいにします。最後に、団体のほうに入ります。
西郷 全国社会人卓球選手権大会は、54年に行われた。
松崎 東北一の郡山総合体育館が48年にできた。ちょうど、オイルショックのときで、今でも多くの体育館が郡山にはあり、県を中心として貢献した。
- 土屋 野村さんがきたときですね。
西郷 大きな体育館ができたので、全国大会や団体の準備ができた。国体ではいろいろなこともあったが、古きをたずねてあたらしきを知るといっているので、教訓としていろいろ記録にとどめておきたい。
司会 詳しくは、平石さんや深谷さんに団体のことはまとめていただこうと思うが、将来のために、これはということのをせていただきたい。
- 西郷 国体運営では須賀川の苦勞が多かったと思うが、いかがですか。
伊東 国体のまえから須賀川で、理事長が平石さん、会計が渡部さん、事務局長が私と福島県卓球協会の役員を15年間もやった。本当は5年でやめるはずが、10年も多くやることになった。会場のことでは、大変もめました。二本松、原町も立候補した。圧倒的多数ではなく、接戦で最終的に、須賀川に決まったのは、平石さんの力が大きかった。地元の卓球協会、白河や石川とも協力できた。特に、白河の堀田さんの力が大きかった。特に、審判などで白河の卓球協会の役員の方にはお世話になりました。事務局としては、深谷先生に半分手伝ってもらった。
- 松崎 関連して、団体の開催地での問題点についてもふれておきましょう。
伊東 熱心に誘致しようという意味で話しましょう。
土屋 県の各理事が原町と須賀川に投票した。21対21の接戦であった。総合的なことから、須賀川に決まったが、須賀川一中でできるのかという問題があがった。会場については、新しく団体のための体育館をつくることを考えているが、今のところ発表できないと平石君が言った。平石君は高木市長に相談し、交通の便や選手収容能力などの諸条件から、日本体育協会に須賀川一中ではできないことを宣言してもらい、今の須賀川アリーナを建設する運びになった。
- 西郷 会場を決める時には、私が県の担当者でいたのですが、原則として、住民の意向、宿泊施設などの他、現有の施設を活用するなどの規程があった。その点では、原町が県営体育館があるので有利であった。しかし、須賀川の高木市長の政治的手腕が大きかった。施設がなくても、作って開催するつもりだったようですね。
- 土屋 スタッフの数や大会運営の点や新幹線などの便から、原町よりも須賀川の方が有利であった。
三浦 二本松も立候補したが2位だった。私の知っている限りでは、須賀川一中では引き出し式の観客席や会場の広さの問題があがったが、会場を後からつくるという約束がされていたようだ。当時の市長としては、卓球会場よりも飛行場をつくらなければならないという予算的な問題もあったわけです。卓球の国体会場を作るといことはその次だったんですね。また、役員か

- らも辞職願が出されていたが、国体までは頑張ろうということで辞職願をあずかっていたんです。
- 土 屋 須賀川の選手である横山選手と小塩選手を出場させることは、平成2年から決まっていたことだが、平成5年頃から、雲行きが怪しくなってきた。須賀川の地元の選手が出場するということが須賀川の開催にも拍車がかかってきたわけだが、地元選手以外の輸入選手を出そうという雰囲気が見られて、須賀川の体制が変わりそうになった。歴史の中での須賀川は喜びと悲しみを一緒に持っているといってもいいと思う。横山選手が参加できなかったことが残念だった。
- 佐 藤 東北のミニ国体では、横山選手を中心にしたが、本番では出場できず残念だった。一部の人だけがわかっている輸入選手を使わなければならなかったのは自分としても本当につらかった。
- 土 屋 佐藤さんは、東北大会の監督として大変な役目を背負わされたわけだ。それもこれも平石理事長の責任も大変なものだった。
- 伊 東 須賀川の今泉一二さんが、消防から国体課へ移り、よくやってくれて成功を収めることができた。人事面での成功の一つだと思う。選手育成では、県独自の選抜強化リーグ大会や小中学生学年別大会が大きかった。
- 土 屋 大会にあたっては、各地区の役員も金銭面での協力をし、スムーズに大会が運営できたと思う。
- 西 郷 須賀川の大会運営も立派だったが、それ以上に選手の皆さんが活躍してくれて素晴らしい成績を収めることができた。
- 土 屋 卓球会場への天皇陛下のご行幸があったことは、素晴らしいことだった。どうして天皇陛下が卓球会場にお見えになったのですか。
- 西 郷 荻村さんが天皇陛下に卓球をお教えしたこともあり、天皇陛下はかなり卓球に関心を持っておられたようですね。高速道路のインターチェンジにも近いし、須賀川アリーナは警備上でもしやすかったのではないのでしょうか。
- 伊 東 平石さんがそのところは一番知っている。警備では近くの釈迦堂川までがきれいになるくらいだった。それ以外にも、地元としての苦勞と喜びは、平石さんがまとめてくれることになっている。総合的に須賀川でやってよかったということをおもひながらいってくれたので、結果としてよかったと思う。
- 土 屋 裏話は歴史にならないが、本当は歴史なんだよね、一番苦勞したのは、平石さんだと思う。
- 大 橋 低年齢からの指導では、三浦先生をはじめとする指導が大きかった。
- 司 会 いわきの井戸川さんや橋本さん、原町の斉藤さん、郡山の深谷さんなどの指導者が頑張ってくれた。これから、どのように指導者を育成するかが課題だと思います。個人の情熱でやっているんです。
- 西 郷 地域社会でのスポーツクラブでの指導者と学校体育の指導者をどのように繋げていくかが大きな課題だと思う。
- 佐 藤 優秀な指導者を県として、表彰などして認め、後継者をつくっていかなければならないと思う。
- 司 会 今日は皆さんの貴重なご意見などをお話いただきありがとうございました。

第二部 「福島県卓球協会の今後を語る」

○と き 平成11年6月5日(土) 13:30～

○ところ 福島市「福島体育館」

☆☆ 新しき時代への架け橋(平成8年～)

出席者

司会：三浦勝美 進行：伊東守信
記録：菊地敏美

大橋 柁 深谷 秀三 伊藤 秀行 甚野 道雄
渡部 長二 齊藤一美(柴田広道) 影山 澄 西郷 徹夫

会長あいさつ

一言ごあいさつ申し上げます。

本日は、お忙しい中、ご参集いただきまして誠にありがとうございます。

今回は「福島県卓球協会70年の歩みを語る」と題し、当協会の草創期から組織確立の時代、そして平成7年に本県で開催された第50回「ふくしま国体」までの三つの時期に分けて語り合っていました。

ご案内のように、今日は前回に引き続いて第2回の座談会を開催する運びとなりました。

テーマは「福島県卓球協会の今後を語る」として、第50回「ふくしま国体」開催後の平成8年から現在、そして21世紀への展望を「新しき時代への架け橋」と題して語り合ってくださいました。

前回の座談会の反省から、今回このテーマについては、組織運営に関すること・各種大会運営に関すること・卓球競技の普及・選手の育成強化に関すること・指導者の資質向上に関すること、その他を含めて5項目について語り合い、現在及び来るべき世紀に向けて、その課題と展望についておまとめいただければ幸いです。

なお、本日の座談会構成メンバーについては、第4回編纂委員会で原案をまとめ、第1回「記念事業実行委員会」で決めさせていただきました。

本日は、お忙しい中出席下さいましてありがとうございました。限られた時間ではありますが、どうか忌憚のないご意見や提言をお願い申し上げます。

司会 ご指名でございますので、司会をつとめさせていただきます。前回の反省で雑談にならないように、議題について個別に発言・要望を出していただきますようご協力をお願いします。

ご案内の内容について順を追って進めていきたいと思っております。なお、時間は3時30分までになっておりますが、始まりが多少遅れましたので、伸びることお許し願います。

それでは、はじめに組織運営についてお願いしたいと思います。なお、「福島県卓球協会活動のあゆみ」の中に項目・内容・課題等が載っておりますので参考にしていただきたいと思います。

西郷 国体終了後には大幅に役員組織が改変されまして、新しい体制で協会の運営にあたることになりました。そのとき卓球協会として一番の課題は何かといいますと、やはり国体の開催を



〈西郷会長〉

契機に全国レベルに達している本県の競技力を、いかに維持向上していくかということであり、もう一つは、国体開催を契機に県民のスポーツに対する関心が非常に高まってきており、それは競技スポーツ志向としてよりもむしろ生きがいや健康を求めて卓球をエンジョイするという動きがかなり出てきています。このような現状を踏まえ、競技力の向上を図りつつ、普及にも力を入れていくための組織運営・充実はどうあればよいかということが、第一項目提案の理由です。

司 会 ただいまは、問題提起という形でお話していただきましたが、どうぞ自由にお発言いただければと思います。例えば、理事が協会組織の中で一人一役を担当していただいていることもあるかと思えます。

渡 部 まず、高体連としては、今まで順調にきていると思っています。大会運営もきちんとできているし特に問題はないが、ただ、組織を構成する者の年齢が高くなってきており、次の世代にどう引き継いでいったらよいか心配です。30代後半～40代前半がいなのが大きなネックですね。

その下の20代はいるんですけどね。運営も強化も育成も、すべてその人たちに任せていくことになりますからね。組織自体はいいんですけど、人材不足が大きな問題です。

司 会 このことは、協会も中体連も同じようなことが言えると思います。実際運営を切り盛りしているのは限られた人たちで、なかなか大変なようです。それに関連して緊急の問題は、事務局の問題だと思います。現在理事長さんが事務局長を兼任しておられることが、協会としての組織運営に関しての問題であり課題でもあると思います。



〈渡部高体連委員長〉

それについてでも何かありましたらお願いします。

深 谷 今、中体連・高体連、そして一部の人たちという話が出ましたが、だいたい全国的にみても、ボランティア活動でたくさんの方でやっているところはほとんどないですね。どうしてもやれるところに頼ってしまうのは、仕方がないということです。ただ、組織の中で、理事長会という組織をつくったので、かなり地区と県の事務局とのつながりができてきていると思います。そのお陰でトラブルが少なくなったということがあげられます。こまめにコミュニケーションを図っているということが成果をあげていると思います。

もう一つは、普及ということがありますが、どの協会も強化をどうするかということに頭を痛めていると思います。その点で、強化委員会が発足し、10ヶ年計画等を作成したりして新たに動き出していることは、いろいろな問題があるにしても高体連と同様に協会もよい方向に進んでいるのではないかと思います。

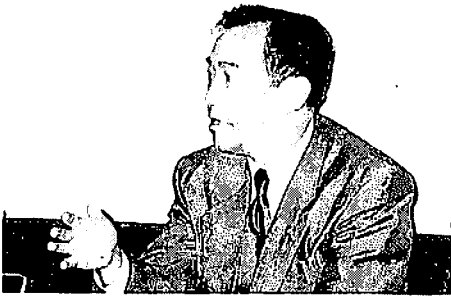
ただ、三浦先生からもあったように、事務局の問題は大変ですね。理事長と事務局長がいっしょに兼務することは土台無理な話で、理事長サイドの事務局がやらなければならないことは、対日本卓球協会、対福島県体育協会であり、そして各地区、高体連、中体連との連絡・調整であると思います。文書を収受・発送して、そして大会の申し込みまでしなければならぬことは、非常に大変ですね。結局大会運営はスムーズにいくけれど、全国大会の申し込み等が地区の理事長にまかされてしまうと、詳しい事情がわからないまま申し込み関係の事務をやるのでかなり大変です。だから県の事務局にはもっと人材がいないとだめだと思います。また、後継者の問題はすべてに関連しますが、ひとつの原因として考えられるのは、卓球を専門としている体育の先生が少なすぎるということです。例えば文部省で卓球の指導者講習会をやるときに、講師に該当する体育の先生がいなくてというのが実状です。後継者を育てる

ということは、また違った意味での大切なことだと思います。

司 会 何かそのほかありませんか。

大 橋 今はほんとうに事務局と理事長さんが兼ねておられ大変でしょう。各地区にもすばらしい役員の方がおりますから、ある程度はお任せをするという発想も大切であると思います。大会申し込みなどは、出すばかりにして事務局に届けてもらってはどうでしょう。それはできると思いますし、そうすれば理事長さんの仕事も幾分楽になるのではと思います。

深 谷 それは言われればできる人たちがいると思いますけど、申し込み等は、外部に提出したときに何か欠けているとやり直しということがあるんですね。だから、大会には県の事務局から誰か来ていて采配をする人がいさえすればいいのではないかと思います。それがないと、全部頼まれても頭の中に全国大会の要項がきちんと入っていないといけなくなります。例えば、ラケットの種類とか生年月日等が抜けていると、また電話等でやり直しになってしまいます。だから、大会には要項を熟知している事務局員一人が来てもらえれば事務は簡素化できると思います。



〈大橋顧問〉

渡 部 去年会津で全日本予選をやった時に、参加資格をとった人が資格と段位の問題で参加料納入についての疑問が出てしまいました。大会毎にいろいろと決まりがあるために、困ってしまいますね。

深 谷 それぞれの全国大会の要項をしっかりと読んでいないと細かい点の問題は解決できないのです。昨年もいわきで申し込み用紙を作成しましたが、結局不備があり参加者全員に一人一人電話で確認をとりました。

事前に全国大会の要項と申し込み用紙をセットで各地区に配布できればよいのですが。

西 郷 後継者問題と理事長と事務局の役割分担問題が組織運営事項の中で大きな問題です。そこで、私は規約にもありますように、専門委員会をどのように機能させていくかということがポイントになると思います。例えば実業団の大会は、競技委員会の誰が窓口になって全国大会の申し込みをするのかとか、競技委員会と事務局の横の連携もあるかもしれませんが、専門委員会の機能をうまく活用できないかと考えております。

深 谷 それは難しいと思います。今までそれができないからこういうふうに来ています。なぜかという、地区の理事長はそれぞれの地区の組織や大会運営方法をもっています。県の事務局にいわれたことはできるにしても、県全体を見渡しながらか事務を執行することは、なかなか難しいと思います。

伊 藤 日本卓球協会の窓口が県卓球協会になるものですから、だから地区の方が分からないことを日本卓球協会に電話しても話しが通じないと思います。

深 谷 だから理事長一人では大変だということです。各地区の理事長さんが、地区の仕事と県の仕事をいっしょにやっていくのはたいへんでしょう。

西 郷 先ほど深谷先生から理事長会ができて、報告・連絡・相談がスムーズにできるになったというお話がありました。事務処理をする上でとても大切なことだと思います。ところで、専門委員会の中に総務委員会があります。主として事務を担当しておりますが、その中に理事長



〈伊藤理事長〉

を補佐する係りを設けて、理事長の指示のもとに事務処理をしていくというのはどうでしょうか。

深 谷 それはできるでしょう。ただし、あくまでも地区の理事をはずしてやらないといけないと思います。県北で理事長がいるので、県北から総務委員とは別に何人か選んでやればできると思います。

西 郷 そういような事務局をつくっていくことが緊急の課題ですね。

深 谷 そのとおりです。全国予選を伴う大会では、最終的に誰が責任者かというみんな逃げてしまう傾向があります。地区の理事長も詳細がわからないので私はここまでとなってしまうことが多いですね。だから、事務局か総務委員の責任者が来て最終確認をしていただくといいですね。いま地区の運営はりっぱですよ。この前の学年別大会でも、860名参加して9時から17時までで終わらせてしまうんですから。

西 郷 トロイカ方式で、大会毎に責任者を決めて理事長が采配を振るえば、後継者も育っていくだろうと思います。また、理事長の負担も軽減していけると同時に人材の活用にもつながってきます。

司 会 これは、一つの提言としてまとめさせていただきます。

大 橋 現在の理事長さんの近くで副理事長さんをつけてはどうでしょうか。

深 谷 それが事務局長ですね。

司 会 まず、事務局をつくることが重要です。

深 谷 先日東北理事長会議に出席させていただきましたが、全国の事務局からすごい情報がたくさん来ていました。それを理事長さん一人で処理するのは至難の業ですね。例えば、今度の世界選手権に東北から一人半額で参加させてもいいというようなこともありました。今回は理事長さんが行けなかったのが会長と副会長が行きましたが、やっぱり他は理事長や事務局長が来ているわけですから異端見的な扱いでしたね。理事長の代理は会長や副会長ではなく、事務局長がやるべきでしょう。

事務局長がいて事務員がいることであればよいのですが。

柴 田 まずは事務局長を確保することが、重要ですね。

深 谷 事務局長は渉外等もあるから大変ですよ。ワープロなどは、事務局員に任せればいんですから。

渡 部 理事長や事務局長が大変なのは、質問にその場で決断しなければならないことです。そういう意味で理事長と事務局長は、大変なんです

深 谷 この前の学年別にも会長さんの代わりに行きましたが、地区の事務からこのお金はどうしたらいいかと聞かれても、どうしようもないですね。だから県の事務局から誰か行ってほしいのです。会場で決断を下してくれる人が必要ですね。

大 橋 各地区では、それぞれ大会について詳しい情報を入手していないですね。前もって情報を県から各理事長に知らせておけば、よいと思いますが。

深 谷 結局は、それらは理事長会のさらなる活性化でしょう。

渡 部 それぞれの大会の要項と申し込み用紙をすべて各地区に流すことが求められています。

柴 田 それは、県北の甚野理事長にお願いしたい。私たちの立場だといろいろな問い合わせが来ますから、そういう時に正確な情報を提示することができると思います。

甚 野 できれば、マスターズや社会人のときに段位を書く欄を設けてほしいと思います。

伊 藤 私の方から合理化についてお話しますと、初年度年間の行事が決まると、申し込みの日程も



〈柴田強化副部長〉

分かります。各地区ではそれらを参考にし、昨年度の要項を参照にすれば県の事務局より今年度の大会要項が届く前に動けるのではないのでしょうか。

司 会 この後いろいろな項目も控えておりますので、組織運営についてはこの辺で打ち切りにさせていただきます。でてきた課題等については、理事長会で検討をお願いしたいと思います。次に各種大会の円滑な運営についてお願いします。

西 郷 各地区で開催されます各種大会の開催基準、役員の編成基準これを明確にしてプログラムをつくっていったらどうかということです。競技委員会等で検討しておけば、誰が担当してもしっかりできるのではないかと思います。また、開会式や閉会式の次第と通告内容・式全体の内容についてもう一度洗い直してみる必要があると思います。例えば、開会式の中で会場使用上の注意を重複して延々とやっている場合があります。そうすると開会式がしらけたものになってしまいます。感動している場面が色あせてしまいます。また、通告で開会の言葉をやるのか、副会長等が正式に登壇してやるのか、いろいろな大会に行くたびに疑問に思っております。

伊 東 中体連、高体連ともにモデルになるものをつくってそれを雛形にしてやっていって、事前に処理できるものはやっていくことが大切だろうと思います。確かに説明でくどくどしいのは私も感じておりました。

西 郷 それともう一つは組み合わせですよ。適正な組み合わせが行われているかどうかです。どの大会も不満が聞こえてくるんですね。

柴 田 卓球協会主催大会は、強化・普及委員会でやることになりました。高体連は高体連、中体連は中体連でやります。

深 谷 今まで、地区でやってしまっていたことがあったので、これからは強化・普及委員会でやるようになったので不満は少なくなるでしょう。

西 郷 強化・普及委員会でやるにしても、競技委員会があるので、整合性をもたせながらやっているといいと思います。委員会の機能を生かすようにしていけると人材の育成にもつながっていくと思います。

司 会 特に小中学生の大会には、組み合わせの基準をはっきりさせることが必要だと思います。それと選手を考えた組み合わせをしてほしいとも思います。

大 橋 組み合わせの基本マニュアルをつくっておくことは必要ですね。

深 谷 シードは強化・普及委員会がつくって、後は開催地区に任せるという方法もあります。ただ、二重の手間がかかるので大変は大変ですね。

甚 野 全軟のときも申し込みが遅れてきて、たいへんでしたからなかなか容易でないですね。

深 谷 大会が毎週ですから、マニュアルだけでも作成すればいいのではないのでしょうか。

柴 田 明日、強化・普及委員会があるので、その時に検討したいと思います。

司 会 これまでは各種大会の運営でしたが、選手育成の項目に話し合いの時間をかけるべきだろうと思います。そこで、私なりに参考資料を持ってまいりました。国体の時の資料と平成9・10年度のバンビからジュニアまでの組み合わせからひろってみました。3・4回戦以上は名前も書いておきました。今までは、ふくしま国体で強化された選手が中心となってやってきました。現在の一般の選手も、国体時高校生で強化を受け大学で活躍しておりますが、大学を卒業すると国体前の福島県のレベルになってしまうのではないかという不安もあります。この資料については、今後の強化に役立ててほしいと思っています。

西 郷 先ほど資料を見せてもらいましたが、これを作成するには、莫大な時間がかかっただろう



〈深谷副会長〉

と思います。選手育成強化5ヶ年計画の骨組みだけ作成しましたが、課題の2番目に戦力分析による課題の明確化というのをあげました。その中には、各都道府県の戦力分析、それに基づく強化計画の作成というような課題を載せておきました。このすばらしい分析があれば、何年後かに強化が花ひらき、どのような強化策が必要かが分かります。

司 会 平成2年から作成して、インターハイや全日本の結果をもとに、加除修正してきました。その一部の資料です。

大 橋 国体の前は、全国でもトップレベルでしたが、現在の状況はそれと比較してレベルが落ちてきているということです。

司 会 この表を見てもらえれば明らかですが、落ちております。小学校より強化してきた渡辺、藤田、高橋等の選手が大きくなっていなくなってきましたから、戦力の低下は、はっきりしてきます。成年女子は、今年1年でしょう。成年男子は今年大学に入ったのがおりますから、その選手が軸となるでしょう。よその県の状況も分かります。宮城県などはゼロですから、国体はよそから集めることになるでしょうね。

西 郷 それはさみしいですね。

司 会 お金がないと選手が集まらないというのが実状です。

大 橋 国体前の指導者の方が、継続して指導しておられると思います。原因は何ですかね。

司 会 国体という勝つための目標がありましたから、選手も事務局も無理してこれたと思いますけど。国体時と比べて、惜熱が薄くなってきていることは確かですね。これはしかたないことですけれど。

西 郷 選手の指導者の温度差があるということですね。

渡 部 この頃、高校はますます金の力で選手を集めるところが多くなってきたように感じます。もう絶対公立は勝てない。インターハイの開催方法を変えたいというのも出ております。

西 郷 卓球に限らず、野球だって、バレーだってそうですね。スポーツ全体がそうやってきたようです。

深 谷 能代工業も、古川商業も、熊谷商業も地元の県の選手は一人もいません。

柴 田 これからの方策ということですが、最近中学校である程度成績をおさめた子が、他県へ行ってしまうことが話題になりました。そういう子を県内に残すのが大きな課題だと思います。国体の時はそういうことがなかったですよ。近年またそういう選手が出てきていますので、強化担当をはじめ、みんなが取り組まなければいけない問題だと思います。

西 郷 なかなか目標の実現は遅いですが、福島県の強化の方向はどうあればよいかというような目指すところがあるといいんだけどね。

渡 部 小学校・中学校であれだけの成績をおさめて、高校で伸びないということがあります。受け入れる側にも問題があると思いますが、高校全体の考え方が、部活はほどほどに、大学受験の勉強をしなさいという傾向が強いように感じます。練習時間もなかなか確保できないのが現状です。それぞれがんばっていると思いますが、国体時のようにはいかないですね。

司 会 小・中・高校のつながりのある指導体制が必要です。ただ、県外に出る選手は、福島県では芽が出ないということも考えられると思います。また、向こうもそれだけのものを提示してきますから。本人の親もその気になってしまいます。

西 郷 学校体育では、優秀な選手を育てきれないところに来ているんだと思います。やっぱり今後は、スポーツクラブにも力を入れた強化をやっていかなければならないところにきているだろうと思います。国体を契機にクラブができ、それらが競技力の向上の支えになっています。スポーツクラブなら、三浦先生からお話が合った小・中・高校一貫した指導ができるのではないかと思います。

伊 藤 今のお話で、地域的なことがあるように思います。安達地区には、三浦卓球クラブ、二本松卓研などがありますが、安達高校には桑原先生がいなくなりました。やはり県の協力が

ないといけないと思います。小・中と指導して高校でだめになってしまう。いい選手を育てる環境があるのに、卓球を本格的にやれる指導者がいない。そういうことでなかなか芽がでないということもあります。

渡部 人事が関係しますね。前は10年だったのが、今度は8年に異動の対象が早まりました。

深谷 国体というものは、地方では強くするために非常に大切であるということです。弊害もいろいろありますが、最後の平成7年度には強化費として2,000万円きました。それでも足りなくて強化費の前借りやユニホーム販売で補充したんですね。選手に対しても遠征にたくさん出せたりといういろいろな恩恵を与えることができました。今福島県の卓球協会の強化費は150万です。残りは県の体育協会の配分でやっているのですから、国体の時と同じ強化は、土台無理な話だと思います。金銭的にも2,000万のお金で強化できるということはすばらしいことです。

昨年度の補助金は800万だったそうですが、それでも補助金がでていること自体うれしいことです。国体の前の状態に戻っただけです。

たとえば、その中でも小・中・高の練習会を年6回やっているとか、学年別大会をやっているとかということは、他県では羨ましがられているようです。学年別の地区予選が5000人ですから、250万のお金がそれぞれの地区に入ることになります。県大会でも860人ですから86万の参加料になります。強化・普及委員会という組織があっても、お金がなければそれなりの強化しかできないんですね。そんな中で、今年は中国に遠征したり、明治大学を呼んでいっしょに強化合宿をやったりと、少ないお金でよく努力していると思います。今後は小・中学生の大会から予算を見出ししていくことが必要になってくるだろうと思います。県大会に出場できる体験の見返りに、強化費を補助してもらうことも必要でしょう。

また、子どもの情報網はすごく早いですね。青森山田が去年から負けなしでやっているという、現在の中学2年生の全国ベスト4はすべて青森山田に入りますからね。小学5年生でも、数人は行きたいと言ってますからね。強いところに行きたいというのはしょうがないことなんですけど。

とにかく、強化費が入るような大会の開催などいろいろな工夫が必要でしょう。

学校の部活については、文部省は学校からはずしたいと思っているようです。地域の複合型スポーツクラブでさせるということですが、ハードもソフトもないのにやろうというのは大変ですね。

西郷 地域スポーツクラブの話が出ましたが、これからのスポーツは、競技スポーツからスポーツそのものを楽しんでいこうとするものになっていくんだろうと思います。その中で競技力の向上はなかなか難しい問題です。時代の流れに世相に逆行することになりますからね。

深谷 ここで提案なんですけど。いろいろな体育館がたくさんできましたが、卓球専用で使えるところは少ないですね。小学校に卓球台を置いて活用してもらってはどうでしょう。小学校の体育館の使用は、剣道とバレーボールがほとんどです。卓球もハード面さえ整えば、できると思います。地道な活動をやっていけばきっと芽ばえると思います。協会として提言をしていただいて、卓球台の配置を要望してほしいんですが。

西郷 日本の体育施設は、世界一なんです。ただ、学校体育は学校、地域は地域と分かれているのが残念なところです。昔は分けて考えることが多かったんですが、今は、学校を積極的に開放していますからできないことはないですね。

深谷 いっぺんにはできないので、二本松地区とか原町地区とか限定して進めていけばいいと思います。

司会 山形の河北地区がなぜ強いかというと、スポーツ少年団がたくさんあって、それぞれが競い合っている状態です。長井もそうですが、学校にも卓球台があり、市をあげて取り組んでいるように思います。強化費も数千万円かけていると思いますが、時間もかけていると思いま

- す。
- 深 谷 河北の話を追加すれば、河北地区には4つの少年団が今あります。中学校は一つですから、すべて集まります。だから各スポ少のエースを強化すればチームができてしまうわけです。練習場も武道館の上に、常時15台を確保しております。河北中学校自体が山形県でスポーツ学校といわれているんだそうですけども。小学校区に1つの卓球のスポ少があるのは驚きです。
- 西 郷 強化というのは、短時間に育てることは無理なのだから、協会として長い目でみてどのように育てたらいいかということ、今育てている選手を財源の確保をしながら強化していくという2つの面から考えなければならないということですね。
- 大 橋 実際に指導している方の意見を聞いて、協会としてバックアップしていくことが必要だと思います。
- 司 会 今日ここでやっている県高校大会でもベスト8に入るには、クラブの選手だろうと思います。ただ、二本松地区は、月曜日が学校の部活動ができない日です。
- 大 橋 いわきも同じですよ。それに第2・4週の土曜日も練習ができないですよ。
- 司 会 私は、中・高校生にはいつでもきなさいといっているんです。私は夜しか使っていないんで、日中はママさんが健康のためにやっていますよ。
- 大 橋 いわきでは曜日ごとに場所を決めてやっていますよ。
- 大 渡 部 今学校ではできないので、そういう形でやっていくしかないんでしょうね。斎藤さんとこは？
- 斎 藤 いえ、やってないです。
- 大 渡 部 さっき深谷先生がいったとおり、喜多方地区は小学校を使っていましたね。
- 柴 田 毎週水曜日に第三小学校で地区の体協というのがあってやっています。大人も子どももいっしょにやっています。
- 西 郷 それは、指導者がきちんとやっているからいいんですよ。責任をもってやるという人がいないとだめですね。
- 斎 藤 指導者よりも子どもがいないですね。場所がいくらあっても、子どもがいないのが一番の問題です。
- 伊 藤 安達の高橋家のように3人娘が次々にでてくるようだったらいいんですけど。
- 伊 東 スポーツに対する熱意がなくなってきているように感じますね。
- 大 橋 中学校の生徒は多いんですけど、それらはすべて卓球をやりたくてやっているのではなく、何か部に所属するために、卓球でもやるかということなのでしょうね。
- 司 会 カデットの大会で、予選に勝ち残れなかった選手だけでまた大会をやってやると、喜んで参加しますね。商品もいいのをくれると参加しますよ。
- 甚 野 県北では、県大会に参加しない生徒を対象に大会を開きます。みんな喜んで参加します。
- 西 郷 そういう企画は大切ですね。
- 柴 田 そうしていかないと、少子化の時代に卓球に引きつけられないでしょう。県大会に強いのが行ってるからといって、やりたくないという子がどっと来て、本予選の人数より多くなってしまうこともあるんじゃないかと思います。卓球協会としてもそのような大会も必要でしょう。
- 司 会 各地区でやっていただけると、喜んで参加すると思います。全日本でやっているスーパーシードのようなことも検討していただければと思います。
1回戦でやって、1・2本で負けてしまうのはやる気を阻害します。
- 甚 野 せめて、勝つ感じを自分でつかむようになればいいんですけど。
- 司 会 今年の全日本予選で検討してもらえるといいですね。
- 大 渡 部 高校生の登録人数は去年男子1,100人、女子573人、今年は男子1,057人、女子515人なんです。女子が60人減なんです。毎年40~50人ずつ女子は減っています。これは、全国的にみてもそうなんです。だから、現在インターハイ女子は個人5、ダブルス3ですけど、来年

は少なくなるかもしれませんがね。男子は、シングルス5になる可能性があります。魅力は、出れる数にも関係するでしょう。

司 会 県北でも、女子高でチームにならない学校もあったんですよ。

伊 藤 保原高校などは、やめた者を連れてきて出場していたという時があったそうですよ。

渡 部 小学校・中学校などではやっていますが、高校になったとたんやめてしまうことが多いんですよ。郡大会でいい成績おさめたのが入ってこないんです。反対に初心者が入ってくることもあるんです。同好会的だと入るんでしょうけど。

西 郷 卓球協会としては、長い目で強化をやっていかなければならないということがありますね。そのような問題にどう取り組むかということについては、2軍選手の大会をもつのは必要なんだけど、小学校入学前の子を引きつける方法も考えていかなければなりません。そのために、ママさんの大会を親子で参加できるような大会にするとかの工夫が必要です。

司 会 強化ということと普及ということを両輪にしていくことが必要です。目の前の強化と中期的な強化・長期的な強化でいかないと途切れてしまいますね。

影 山 家庭婦人の方も若い方の参加が少なくなってきていて困ってます。今後維持していけるんだろうかということがあります。今年「すみれ」に若い方が入りましたが、郡山は根本さん以降入りませんね。だからいつまでも30代に出るしかないんです。

司 会 今は、バレーが盛んですね。娘が卓球にきていても自分のことだけでかまいませんね。

西 郷 父がゴルフ、母がバレー、子どもが卓球なんていうのがありますね。これからは、各支部で普及のための行事をもってもらうのがいいですね。

伊 藤 いろいろなスポーツが盛んになり、なかなか体育館がとれないということがあります。

柴 田 近い将来日本で賞金付き大会を開催したいということが出てきているようです。それは全国理事長会等ではっきり決定したことですか。健勝苑という会社がゴルフのスポンサーをやっているんですが、今度高額の賞金付き大会を開催して、卓球の普及と活用化を図ろうとしているという話を聞きました。以前は野球オンリーだったのが、サッカーでも、卓球でもいろいろ出てきてよいことだと思います。卓球の普及にも追い風が吹いているように感じます。

司 会 商品の話ですが、ベスト16くらいまで何らかの商品を出してやるべきでしょう。子どもには喜びであり、やる気につながります。

西 郷 理事長さん、メダルを今度あげようという話がありますね。

伊 藤 メダルは3位までですね。

伊 東 参加したくなるような魅力ある大会にしてやる必要がありますね。

斎 藤 大きく考えるには、各地区で何をやるかなんです。相双地区では、相双地区版強化リーグをつくって、一般から小学生までいっしょにリーグをつくってやりました。いっきに200人出場しました。ママさんが練習したり若いのが大会に出たりすることにより、将来そのような方の子どもも卓球をやることを期待しています。長い時間かかりますが、そのような小さいことから始めています。

司 会 各地区の実状に合わせて、創意工夫しながら実践してもらうより仕方ないですね。

斎 藤 卓球をとおした町・村おこしをやっていかなければしょうがないんです。悩んでいても仕方ないです。

西 郷 行政に働き掛けて、巻き込んでいっしょにやることですね。

大 橋 この前新聞に卓球はボケ防止に大変いいと載ってました。ああいうのがあると年齢の高い人



〈影山家婦連理事長〉

が結構やるんですね。

司 会 この辺で、4番目の指導者の確保と指導者の資質の向上についてお願いします。
地元出身者が東京から戻ってくるときに、職場の問題もあると思いますが。受け皿がないからよそにってしまうこともあるようです。

斎 藤 県からの要請で中国人が来ます。2年間は、高度な技術を持った人たちには活用できると思います。その2年後をわれわれは考えていく必要があります。

また、学校の先生が多くなればいいなと思いますけど。

伊 藤 安達に桑原先生がいなくなって、小・中学校の選手の受け皿がなくなってしまいました。卓球のできる先生が来てもらえるといいんですけど。

斎 藤 県とのヒアリングでは、その問題は、各地区の教育委員会と話さないと分からないということでした。

柴 田 学校の事情で卓球を受け持てないこともありますからね。

西 郷 卓球ならできるけど、他のスポーツはできないという先生もいますからね。

司 会 二本松二中の長谷川先生は、専門がバスケットですが、自分で見よう見まねで熱心に指導してすばらしい成績をおさめています。

西 郷 栃木県の真岡女子高校の大島先生は、復員してから卓球の顧問になった方です。一年目は生徒の後をついて回った。二年目は自分でノートをとって勉強した。3年目は、全国大会で優勝ですからすばらしいですね。一生懸命やれば、指導者としてりっぱになれるということです。

司 会 長谷川先生もやっぱり勉強しましたね。人に聞いたり、自分で勉強したりしてました。4月に結婚したので、家庭も大切にするようにいいましたけど。

渡 部 毎年のように顧問は変わっています。中学校も同じだろうと思いますけど。新しい先生はやりたがらない。忙しさもあるけど、集中してやるんだったら、小さな学校に比べてやった方がやりやすいでしょう。顧問の希望は卓球が多いですよ。引率顧問でいいですから。審判もやる必要ないですから。

西 郷 そういう人たちを燃えさせるために、きっかけをつくってやる必要があると思います。

斎 藤 OBとか地区の協会で指導者の講習会を開くとかしないとかだめなんですね。

柴 田 県大会で優勝した時は、ボーナスを出してはどうでしょう。

伊 東 今は親が子どもをおだてて、飲ませて食わせてやらないとやらないですよ。

環境と人間性だと思いますよ。川俣に行った高橋先生も始めてだったんですよ。でも興味をもってやりましたからね。

柴 田 体育館が使えなくて廊下だけでやっている人もいるわけですから、それでも福島では一番強いチームを作りますからね。

渡 部 あまりにも環境が良すぎてもだめなことが多いですよ。

伊 東 中島が優勝したときもやはり廊下だったんです。先生も初心者でしたから。

西 郷 目の前の生徒を強化するためにどうすればよいかをいつも考え、創意工夫をしていくんです。自分が指導できなければ指導者を連れてきて指導してもらえばいいわけです。やる気さえあれば、いくらでも方法はあるはずですよ。それで、卓球が指導できる人は何でもできるよということになってくるんです。

斎 藤 何でもそうなんじゃないんですか。小高王業の時のように、やる気ある先生といっしょになって周りもやるのが大切です。それが切れてしまうとだめですよ。



〈斎藤強化部長〉

西 郷 スポーツクラブの指導者と学校体育の指導者とがうまく補完しあうことを考えていかなければいけませんね。

斎 藤 強化・普及委員会もクラブの指導者と学校体育の指導者の連携を図ろうと努めています。クラブは、学校ありきという姿勢で学校の立場を理解しないといけないと思います。

渡 部 学校もいろいろ大変なんです。

斎 藤 いやそのとおりです。クラブ指導者があまりに出してしまうと学校もカクンとなります。

渡 部 高校は今大学進学ばかりだからね。なるべく部活動をやらないようにだからね。

斎 藤 そのへんを指導者が理解しないとぶつかるんですよ。学校側や一般人からすると、セントラルなんか卓球馬鹿しかつづくられないと思われていると感じています。でもお互いの立場を考えてやらないとうまく解決しません。

西 郷 学校側としても、外部の指導者を積極的に活用していかないといけないでしょう。

渡 部 そうするとお金がかかりますから、学校では出してくれないですよ。

西 郷 私事になりますが、相馬高校在職のときに部活動後援会を結成しました。高額備品やバスなどの購入はすべてそれを使ってやります。一人入学時に1万5千円集めました。そのような体制ができていれば出せると思いますが。

司 会 安達の場合は、金銭的な応援をOB会に要請しました。

司 会 それでは、大体出尽くしましたのでその他に人ります。先ほど出ました広報活動ですが、大会をやった場合にできるだけ新聞等に出してもらえるように、ニツクやバタフライなどにも出してもらえるように働きかけをしていかないといけないと思います。それが一つの啓蒙になるんだらうと思います。

斎 藤 最近卓球出ないですよ。

司 会 出ても小さいですね。他の競技種目から比べるとね。

柴 田 国体時などは、本間君（ラジオ福島勤務）が原稿を書いて編集部に出していたことがありますね。あの時は結構細かいところまで新聞にのってましたね。

斎 藤 新聞社と仲良くならないとだめですよ。寄付金等のお金も結構かかりますが。新聞社へ連絡もしないとだめですけど。

司 会 二本松にもマメ新聞がありますから、大会終了後は結果を持っていきます。

伊 藤 各支部でマメに広報活動をしていくことが、一番ですね。

柴 田 広報委員会というものはあるんですか。

西 郷 広報委員会はありません。検討課題に挙げておきましたけど。スタッフがいて記事をその方にやれば広報が出来るといいんですが。総務委員会の仕事ですよ。

斎 藤 それは、責任者をはっきり決めないといけません。そうすれば、きちんとやれると思います。

西 郷 さっきから申し上げているとおり、各専門委員会の活動を活発にしていくことが大切です。それが人材の育成にもつながってくると思います。

柴 田 20代の前半の選手に卓球協会の役員をやってみるかときいたことがあります。手伝いはやりますが、責任を持ってやるのはどうも、という答えが多いです。

斎 藤 上の人が言って聞かせるんですよ。ボランティアがしっかりとできない人は、偉くもなれないぞと。若い人は試行錯誤でやりますよ。若い人は、若い友達を集めてきますから、そこで活性化していくんです。年配の人はしがらみが強くていけません。

大 橋 県の事務局をしっかりと確立させ、事務の分散をしていかないとだめですね。



（司会 三浦名誉会長）

斎 藤 強化リーグの長場先生のように、3人の先生といっしょに事務を進めていくこともできるます。そのかわりに強化担当の顧問の生徒を何人が強化リーグに参加させていくということも一つの方法だと思います。

西 郷 人がいないいいないではだめです。育てることが大切です。そのためには、仕事を具体的に教えて、やってもらうことが必要でしょう。やればやるほど自信がついてくるんですから。

斎 藤 昔と違ってパソコン等もありますからできますよ。

司 会 本日は、長時間にわたり、お話していただきましてありがとうございました。お話の中で出てきた課題等はそれぞれの委員会や係りで検討していただき、ますますの協会発展を期待したいと思います。

本日はありがとうございました。